

## 寄稿

## 秋田の数学教師の実践研究を助成した齋藤六三郎賞

湊 三郎

秋田大学名誉教授・あきた数学教育学会顧問

## 要約

本論考の目的は、昭和 60 年から平成 26 年までの 30 年間にわたり算数・数学に関わる優れた実践研究を行った秋田の教師に与えられた齋藤六三郎賞の経過と終末、及びこの事業を創設した齋藤創氏に関して記録し、それを将来に残すことにある(数学は算数・数学を指す)。

収集した資料により、助成を受けた全ての実践者・研究団体に関する研究題目と助成金額を一覧表として記し、更に終末段階での運営委員会で執った措置、齋藤創氏の理念、及び部分的ながらその人物像を記すことができた。

なお、本論考はあきた数学教育学会誌に投稿すると共に、冊子も作成する予定である。

キーワード: 助成, 数学教師, 実践研究, 秋田

## 0. 本論考の目的と記述に関して

表題中の齋藤六三郎賞を与える基金の正式名称は「公益信託 齋藤六三郎記念数学教育助成基金」である。本論考は、算数・数学において優れた実践研究を行っている秋田県内の教師に対する助成を昭和 60(1985)年から平成 26(2014)年までの 30 年にわたって行ったこの基金、及びその創設者の齋藤創氏に関して将来の世代に向けて記録することにある。執筆者の湊(以後私と記す)は、終末を含むその三分の二の期間を運営委員として、特に受賞者の選考(第 2 次審査)、及び基金終了に向けた規約の改定の提案を行い、かつこの件に関して齋藤創氏と直接の関わりをもった者である。

以下で、賞については齋藤六三郎賞、基金については本基金などと略記することがある。

本論考において、齋藤家三代にわたる齋藤六三郎先生(このようにお呼びする理由は本文で明らかにする)、そのご長男で御父上の名を冠した助成を企画創設された齋藤創(さいとう・はじめ)氏、及び齋藤創氏のご長男であり、記録作成にご理解と協力とを戴いた齋藤荘(さいとう・そう)氏

に話が及ぶ。なお、「齋藤」の字体はこれであることを齋藤荘氏からご確認戴いた(2019, 6, 19)に入手した同氏からの返書による)。

秋田県総合教育センターの担当者によって作成された受賞可否判定のための基礎資料(第 1 次審査資料)、運営会議に提出の運営委員による審査結果の報告や運営会議における評価は結果のみを記し、具体的内容については記さない。受賞者は既に何度か新聞でも報道され、個人情報に関する意識の高まった近時では受賞した場合に氏名や所属を公表することの許諾を応募する際に得ており、基金として明らかにしておくべきであると考え、受賞者の他、最終回の努力賞受賞者も本論考に記載する。ただし、この最終回以外で、応募したものの受賞には至らなかった者の氏名や所属は記さない。

なお、私が本基金に関わっていなかった発足から 10 年間については、基本的事項のみしか記録し得ないことをあらかじめお断りしておく。

本論考では、生前の齋藤創氏、特に同氏から戴いた多数の書簡の他、齋藤荘氏、三菱信託銀行リ

テール受託業務部、齋藤家の菩提寺光禅寺、秋田市社会福祉協議会から得た情報を用いている。

以下、本論考の6. 齋藤創氏の人物像の一端と7. 後書きとを除き、齋藤六三郎先生と齋藤創氏には論考等の場合の通例に沿って敬称を付けることをしない。この通例は他の方々についても同様の扱いとすることをお断りしておく。

### 1. 賞に冠せられた齋藤六三郎

本基金に冠せられる「齋藤六三郎」は人名で、明治42(1909)年1月に由利郡松ヶ崎に出生、昭和59(1984)年1月に逝去された方である。

秋田県師範学校本科を昭和3年に卒業し、小学校教諭を経て戦前の(旧制)本荘中学校に昭和17年4月に赴任され、続いて昭和22年の学制改革によって発足した(新制)本荘高等学校の数学教師を務められた。先生とお呼びしたのはこの故である。昭和3年から昭和17年のこの期間は小学校勤務の傍ら、戦前の制度としてあった中等教員資格取得のための検定試験の準備にも費やされたと思われる(戦前の中等教員であるための学歴としての資格は原則として高等師範学校卒業以上であり、師範学校卒業者に対して資格取得のための検定試験制度があった)。

一般に検定教員は一定以上の実力を持つとして評価されており、齋藤六三郎は本荘高校の数学教師として評判を得ていた。

本基金預託者の齋藤創によれば「父、齋藤六三郎は真正なマルキスト」であった。出生地の本荘松ヶ崎には同様の思想を持った者が戦前には他にもおられたらしく、地域的・個人的な影響もあったかも知れない。松ヶ崎は隣接する町の保守性とは対照的であったという。齋藤六三郎は昭和24(1949)年3月に本荘高校を40才の若年で退職された。

当時の我が国の実質的最高権力者GHQが日本政府に対して共産党の非合法化を示唆した。官公庁、大企業、教育機関等からの共産主義者とそのシンパ(サイザー)の追放を勧告した。この勧告はGHQがWGIP(War Guilt Information Program)の

一貫として戦争直後の昭和21(1946)年に行った教職追放や公職追放ほどに徹底したものではなかった。またWGIPで追放された者と入れ替わりに職を得た者の中に該当する者が多かったともいう。全国で一万数千人以上がこの動きを受けて退職したと言われている。

齋藤六三郎の退職はこの動きに対して早期であり、自発的なものだったのではないか。この時、一家は本荘市内の出戸町御門に居を構えており、妻ハルエ(旧姓渡辺、昭和5年、秋田県女子師範学校卒)は教員を勤めていた。齋藤六三郎は退職後は数学の塾や個人指導等をされたという。

### 2. 本基金創設者 齋藤 創

基金の創設者、預託者の齋藤創は、齋藤六三郎、ハルエの長男として昭和9(1934)年1月25日に本荘市松ヶ崎に六人兄弟の長男として出生した。

当時の松ヶ崎国民学校から旧制度の最後となる(旧制)本荘中学に昭和21(1946)年4月に入学、昭和22(1947)年の学制改革を経て昭和27(1952)年3月に本荘高等学校を卒業、同年4月明治大学法学部に入学した。ここで病魔に見舞われて肋膜炎を罹患し、二年半の療養生活を経て昭和33年3月に大学を卒業した。同年11月に新日本証券(山叶証券)に入社、昭和36(1961)年に須藤正、栄子の長女幸恵と結婚、新日本証券の各種役職を歴任し、昭和58(1973)年10月に秋田支店長となる。

昭和59(1984)年1月の父齋藤六三郎の死去に伴い、齋藤創は同年7月に公益信託 齋藤六三郎記念数学教育助成基金(一千万円、その後二千万円)を創設し、昭和60年度から助成が行われた。

昭和61(1986)年3月に二度目の病魔である直腸がんのため秋田赤十字病院で人工肛門(ストーマ)を造設、障害2種4級となり、62年3月をもって新日本証券を退社した。秋田あけぼの銀行(現北都銀行)の片野頭取と本山副頭取の招きを受け昭和62(1987)年4月から同銀行証券部営業部長に就任、平成4(1992)年3月に停年退社した。

齋藤創はその後、宅地建物取引主任者の資格を取得したり、オストミー協会秋田県支部長や秋田

県身体障害者福祉協議会の役員等を勤め、幾つかの学校や団体において障害者理解の促進に関する講演を行い、遊学舎、県庁、市役所、県社会福祉会館等へのオストメイト対応トイレの設置を促進させ、また秋田県経済の活性化に関する講演や進言なども行っている。平成20年の8月には母校明治大学の全国校友秋田大会の開催に尽力し、特に「明大マンドリン倶楽部演奏会」開催の責任者として秋田県民会館に1,800名を集めて開催を成功させた。

その直後の平成20(2008)年12月に腹部大動脈瘤の手術を市立秋田総合病院で受けるという三度目の病魔に見舞われた。見つかったが東京で会議があり、帰ってきてから手術するとのお話をされておられ、この頃はむしろ益々意気盛んという感じであった。平成25年の秋頃には体調の優れない日もあると言われながら、お会いしている限り元気そうであったが、基金の最終年(平成26年)の初夏に向かう頃から次第に体の異変が生じてきたらしく、結局基金終結のための平成26(2014)年7月25日の運営委員会を欠席された。秋田県教育長米田進名義の感謝状と花束とを贈られたのであるが、この件は5節の(5)において改めて記すこととする。

平成26(2014)年8月25日7時28分永眠。同月28日に秋田典礼会館セレモにおいて、社会福

祉、身体障害者福祉関係者が多数の中に、齋藤六三郎賞に関わる信託管理人や運営委員の方々も参列し、喪主で長男の齋藤荘のもとで葬儀が行われた。菩提寺は秋田県由利本荘市松ヶ崎字光禅寺前105に所在の光禅寺(住職伊東義寛)である。

身体障害者福祉に関わる主たる受賞歴を記す。

- ・平成15年7月 秋田市身体障害者協会会長賞
- ・平成20年6月 秋田県身体障害者福祉協会会長賞
- ・平成22年7月 秋田県知事賞
- ・平成22年12月 厚生労働大臣表彰

なお、齋藤創に関する上の記述の多くは、平成23(2011)年1月30日に開催され、百名超の参加者に祝福された齋藤創氏厚生労働大臣表彰祝賀会における資料「齋藤創氏(77)のプロフィール」からの抜粋である。

以下では、齋藤創に関しては社会福祉、身体障害者関係の事績には深入りせず、本基金に関する件に大凡特化して記すこととする。

### 3. 助成実績

#### (1) 助成実績一覧表

ここでは助成を受けた方々(次に記す表では助成対象者と記す)、その所属、研究題目(長いものは要点のみ記す)、及び助成金額の一覧をもって本基金の助成実績を記録する。

#### 公益信託 齋藤六三郎記念数学教育助成基金助成者一覧

注. 所属に幾分の簡略と研究題目では実態を明示する範囲での省略を行っている。

回	通	年度	助成対象者, 所属	研究題目(副題省略)	金額(万円)
1	1	昭60	齋藤松子, 大館二中	学習指導の改善を目指した観点別評価の研究	20.
	2		横手平鹿算数数学教育研究会	学習過程における評価 「観点」別評価の実際と考察	20.
	3		畠山和也, 秋田高	活力ある数学の授業への模索	20.
2	4	61	佐藤テイ子, 本荘市立子吉小	指導と評価の一体化を図った指導過程	20.

	5		後藤晃男, 生保内中	パソコンによる授業分析法の開発 と個別学習指導法構築の実証研究	20.
	6		川田 信, 大館工業高	基礎学力向上のための研究	20.
3	7	62	横手市立朝倉小学校算数部	問題解決の過程を通して, 数学的な考え 方を育てる指導	20.
	8		佐藤敬顕, 能代一中	類型を生かし, 学習効率を高める指導 の工夫	20.
	9		近藤啓子, 増田高	プリント授業に取り組んで	20.
4	10	63	五城目町立内川小研究グループ	計算力を高めるための指導	20.
	11		増田町立増田小学校算数部	自分で解決する力を育てる指導	20.
	12		田村良則, 能代市立鶴形中	一人ひとりに学習内容を定着させるた めの教材の工夫	20.
5	13	平元	秋田市立桜小学校研究部	一人ひとりを高めるためのマスタリー ・ラーニング理論に基づく実践指導	20.
	14		鷹巣町立鷹巣中学校数学部	意欲を引き出し理論的な思考力を伸ばす 学習課題とその展開	20.
	15		高橋悦美, 湯沢市立湯沢東小	立体の指導についての一考察	20.
6	16	平 2	佐藤哲也, 森吉町立森吉中	ダイヤグラムに基づく関数 $y = ax + b$ グラフ書きの試み	20.
	17		八柳久夫, 秋田大学附属小	算数の典型的な授業過程の構成とビデオ テープの開発	20.
	18		中仙町立中仙小研究グループ	一斉授業の中で個を生かす算数学習	20.
7	19	平 3	塚田雅人, 本荘市立石沢中	課題学習への取り組みの一事例	20.
	20		田山義貴, 大館市立東中	学習課題の取り組みについての研究	20.
	21		湯沢市立湯沢東小算数部	自ら解決する方法を見つけ互いに学び合 う指導	20.
8	22	平 4	黒木 允, 本荘市立南中	学習シートの作成とその活用	20.
	23		佐藤久生, 比内町立西館小	1学級2名の協力教授による指導効果	20.
	24		秋田市算数シート研究会	シート B 段階の取り扱いと予習課題の 採り上げ方	20.
9	25	平 5	桜井文代, 合川町立南小	算数のロングタイム学習に取り組んで	20.
	26		仲山 智, 男鹿高校	中高連関を考えた自作問題集と指導法	20.
	27		大沢和浩, 県立南養護学校	教師による自己評価の実際と考察	20.

10	28	平 6	秋田市立築山小算数部	TT による継続指導	20.
	29		秋田市算・数研究会中学部	課題学習における問題と指導法の共同開発	20.
	30		滝内金悦, 大館市立矢立中	学意欲を高め, 確かな学力を身における指導の工夫	20.
11	31	平 7	豊嶋裕美, 男鹿市立南中	TT とモジュール方式の学習を通して	20.
	32		松岡浩幸, 大館市立桂城小	楽しくできてよくわかりもっとやりたい算数をめざして	20.
	33		林崎 勝, 秋田市立築山小	課題追究型の単元構成と適正処遇交互作用	20.
12	34	平 8	考え MATH の会, 湯沢北中	主体的学習を実現するための諸要素	20.
	35		北嶋尚子, 秋田市立築山小	TT の機能を生かし、自己評価を重視する実践	20.
	36		小林一彦, 大館南小/扇田小	判断力の充実をめざす BIG-QUEST	20.
13	37	平 9	河田弘幸, 鷹巣西小/扇田小	見通しをもち, 筋道を立てて考える子どももの育成	20.
	38		三條正弘, 秋田西中	やる気を高める教材開発、指導法と評価の工夫	20.
14	39	平 10	高橋悦美, 雄勝町立雄勝中	子どもの問いが連続する学習	20.
15	40	平 11	大友智加司, 秋田市築山小	学習の主体者として, 意欲をもって取り組む算数の展開	20.
	41		三條正弘, 秋田西中	第 81 回全国算数・数学教育研究(秋田)大会へ向けての研究	20.
16		平 12	(該当者なし)		
17	42	平 13	畠山 修, 仁賀保平沢小	児童みんなができるようになる算数の実践	20.
18		平 14	(該当者なし)		
19	43	平 15	山口 誉, 北秋田代中	図形領域における基礎・基本の定着を図る数学的活動の実践	20.
	44		本荘子吉小研究グループ	少人数指導における学習成果	20.
20	45	平 16	渡部古都, 横手金沢中	学び合いを深めるための数学的活動	20.

21	46	平 17	男鹿市立北陽小 能代山本算数数学研究	評価を生かした指導方法の工夫改善	20.
	47			問題作りで授業改善と基礎学力向上 をめざして, 郡市一斉テスト 50 回	20.
22	48	平 18	佐藤栄樹, 泉中, 伊藤学, 太平中, 鑑基倫, 岩見三内中	よさや楽しさを味わわせる図形指導	20.
23	49	平 19	大友正純, 秋田市豊岩中	小中一貫した考えに立った算数・数学指導	20.
24	50	平 20	大庭 了, 本荘市岩谷小	算数・数学における読解力向上のため の方策	20.
25	51	平 21	柴田道子, 湯沢高稲川校	三角比から三角関数への導入 ~ 作業を 通して発見から考える数学へ	20.
26	52	平 22	秋田市算数・数学教育研	豊かな学力の育成をめざした算数・ 数学教育, 1 年次の取り組み	20.
27	53	平 23	大友正純, 秋田市豊岩中  柴田道子, 湯沢高稲川校 中仙教育研学力向上部会	算数から数学へのスムーズな接続を めざした取り組み	30.
	54			図を描きながら物理を考え描く	30.
	55			算数・数学授業力向上のための地区 連携による組織的取り組みについて	80.
28	56	平 24	佐々木充宏, 秋田高 三戸 学, 秋大院生(現職)  秋田県高校研数学部会 秋田市算数・数学研究部	IT 機器を活用した授業の取り組み	30.
	57			数学的思考力・表現力を高める指導の 在り方~ 言語活動の充実を目指して	30.
	58			授業力向上のための組織的な取り組み	80.
	59			豊かな学力を目指した小中の共同研究	80.
29	60	平 25	湯沢雄勝算数・数学研  本間光幸他 4, 本荘由利  椎名美穂子, 天王小 菅原 勉, 天王南中	算数・数学的活動を通して確かな力を 育む授業の創造	80.
	61			思考力・判断力・表現力を伸ばす授業 改善 ~ 記述式の問題設定	30.
	62			円の面積における算数的活動の充実	30.
	63			数理的に考察し表現する力を高める 授業の創造 ~ 付箋紙活用の取り入れ	30.
30	64	平 26	あきた・まな VIVA 塾	数学オリンピックで上位入賞できる	300.

		人材を育成する取り組み	
65	本荘由利教育算・数部	算数的・数学的活動を通して基礎・基本の定着と活用する力の育成	80.
66	鹿角算数・数学教育研	小中連携を通して確かな力を育む算数・数学の授業の在り方	60.
67	能代山本算数・数学研	思考力・判断力を育み、児童・生徒が主体的に取り組む授業の創造	80.
68	大曲仙北算数・数学研	課題別研究グループを単位とする算数・数学授業力向上のための共同研究	80.
69	秋田県算数・数学研究	中学校数学科における文字式の学習指の改善に関する研究	80.
70	伊藤弘幸, 秋田市中通小	学び合いを取り入れた課題解決の学習ー広義のシート学習	30.
71	上松起利子, 男鹿東中	言語的表現を用いて記述する活動	30.
72	中山憲太郎, 仙北中	予想を取り入れた「あきた型数学」の授業実践	30.

昭和 60 年度から平成 26 年度まで 助成 72 件

合計金額 2260 万円

平成 26 年度だけに特別に設定された努力賞受賞者(各 1 万円, 計 5 万円, 上記の合計金額外)

泉 一也(秋田勝平中学校), 淡路亜津子(湯沢翔北高), 倉田一広(湯沢稲川中), 高橋裕樹(鷹巣南中), 長沢留美子(東成瀬中). (以上 5 名)

注 上表は各年度の運営会議資料の他, 三菱信託銀行公益信託グループ宛に資料提供の依頼(令和元年 6 月 25 日)をし, 同年 7 月 4 日付けのリテール受託業務部公益信託課の宮下雅裕からの返信と佐藤敬顕, 田村良則, 高橋悦美への問い合わせに対する返書や電話によって補充して作成した。

## (2) 教育現場の状況と授賞者

齋藤創の受賞者に対する大きな期待は当然のことである。その期待は教育実践の枠を超えたところにも及んでいたように見受けられたけれども, 社会的常識からはみだす程のものではなかった。

第一回受賞者の一人である畠山和也が鷹巣高校の校長になられたことを喜ばしいこととして運営会議の際に何度か話されていた。勿論, 彼に受賞をしたことが, 秋田県教育委員会の評価の方向性に合致していたことが示されたこともうれしいことであつたに違いない。この選考は私が運営委員

になる前に行われていたものながら, 運営委員に加わり彼の受賞を知った時に私もうれしかっただけでなく, 齋藤六三郎賞の社会的意味を深く考えさせた。私的なことを言わせて貰えば, 秋田県教育庁の佐藤良一郎高校教育課長(後に, 次長, 岩城町教育長)が, 秋田県出身者の一人を秋田工業高等専門学校の数学科に入れたいという同校の渡辺市郎教授(両人は同郷の間柄にある)の希望に対して, 私を同校に入れることを奨めたという(渡辺市郎教授からの口頭, 時期は同高専に任用の昭和 43 年頃)。このことは, 畠山和也を将来の指導主

事、あるいは管理職者として秋田県教育委員会が考慮していたことを物語る。

もう一人の第一回受賞者である齋藤松子は、県北大館の数学の学力の向上というより、もっと広く教職意識の向上に困難を顧みず尽力された実績をもち、数学教育に限定すればシート学習を通じて学力の向上と教師の実践力の向上に多大な功績を挙げられた方と私は承知している。私の大学在任中に中学生向きに開発された学習シート3学年分をお願いして送付頂いたこともある。彼女の積極的な実践活動に対して少なからぬ冷たい仕打ちも与えられていたのではないかと私は推察する。

前世紀20世紀の戦後は、米国印の生活単元学習や科学主義を物化して実現したプログラム学習に対抗して、実はこれも科学主義の立場に立ったうえで、専門技術的数学にできるだけ近い内容・方法をもって教えることを目指す数学教育協議会が設立された。この協議会による活動は運動的性格を強く帯び、積極的な研究・実践活動をもたらす一方で、この運動が教職員組合の活動と一体化したことからであろう、多数の力をもって他の考えを打倒する運動に発展し、数学教育において立場を異にしながらも、熱意のある研究・実践をする者の活動の妨害へと動きだし、当然の結果として数学教育、広く学校教育の荒廃を招いたと私はみる。前記した第一回の受賞者の兩名は、このような現場の状況を克服せんとしていた者達の代表者と言ってよい方々であった。

昭和60年から開始した齋藤六三郎賞は、純粋に(自己の考えを相手の打倒のために用いることを専らとしない)熱意のある県内の実践者をどれほど勇気づけたかわからない。ちなみに、この時代(20世紀の終わり頃まで)のある期間、全国教育研究所連盟の会長をされた平塚益徳が中心となり立ち上げた全国規模の社団法人教育研究連合会が教職員の実践活動に対する表彰を行っていたのは、このような教育現場の状況に対するものであったろう(1979、1990の両年の表彰式に参加した経験をもち、式の目的や雰囲気を知っている)。

齋藤六三郎賞の果たした役割のうち、もう一つ

の極めて大きいと感じられるのは、個々の教師や受賞者に対する称揚や支援とは別に、バブル崩壊後に生じた数学(教育)バッシングに対して、算数・数学教師を精神的に支え、算数・数学、及びその教育の重要性を公的に認める団体として本基金が存在したことではなかったか。この時代、「数学」はマスコミに忌み嫌われ、大学の学科・研究室の名称から「数学」が消えて「数理科学」に変わったという事実があり、それに対する嘆きが聞こえたものであった。勿論、この時期、数学と情報科学の接近があったけれども、上記のようなバッシングがなければ数学はそれとは全く素性が異なり、Science of Artificialの性格をもつ情報科学との接近がこれほど生じたであろうか。数理工学の甘利俊一(令和元年の文化勲章受章者)が初期に開発した情報理論(情報幾何学)が受け入れられるまでに如何に難儀されたことか。

#### 4. 本基金による助成の進展

##### (1) 発足当初の運営委員等

本基金の発足の十年後から私は運営委員となった。設定時の受託者や運営委員等の状況は知らず、手持ち資料も全くなかったので、三菱UFJ信託銀行に問い合わせた。設定時の状況は齋藤創の考える理想の実現であったと思われるので下記しておく。

受託者 「齋藤六三郎記念数学教育助成基金」  
の設定時の受託者は「日本信託銀行株式会社」である。

(その後、二回の合併を経て、社名が「三菱UFJ信託銀行株式会社」となる)

設定時の信託管理人、運営委員長及び運営委員

信託管理人	狩野豊太郎(秋田県土地開発公社 理事長)
運営委員長	齋藤 長 (秋田県教育長)
運営委員	菊池俊一 (元秋田県立秋田高等学校長)
同上	宮田正彦 (秋田県数学教育研究会 会長, 元秋田大学教授)
同上	高橋信市 (秋田県教育研究会算



数・数学部会長、秋田市立土崎中学校長)  
 同上 平間文次 (秋田県高校教育研究会  
 会数学部会長・秋田県立本荘高等学校長)

本基金に最も長く関わったのは、齋藤創を除けば設定時から信託管理人をされた狩野豊太郎であるが、本基金の最後の信託管理人を勤められたのは前年度から信託管理人になられた片倉幹男(元本荘市教育長)である。

## (2) 受賞対象者の選考

当初、授賞者の決定は秋田県(総合)教育センターの指導主事による第一次審査を経て、これをオーソライズする形で運営会議によって決定されていたと思われる。私が運営委員に加わったときは、この第一次審査のもとで、私が第二次審査を担当して結果をセンターに送付し、運営会議においてオーソライズするものであった。センターに送付した受賞者の第2次選考結果が運営会議で変更されることはないとの前提で、受賞該当者は当日の案内を受けて待機され、会議終了後に入場されて表彰を受け、運営委員と事務局の者達と共に会食をする慣例になっていた。この慣例は最終の運営会議まで続いた。

私が運営委員の一員となってから、第一次選考の結果を勘案しながらも、私の考えをも選考に挿入することになり、申請者の、特にその上位者の順位が若干変更になり、その結果、助成者が第一次審査と入れ替わる事態が極めて希ではあるが生じた。責任を果たすとすれば、異を唱えることも時に必要にならざるを得ない。実践研究に対する現場の感覚と研究者の感覚との間には致し方のない差違があるように思う。ただし、私は個人的な知遇や個人的な関係といった理由で、ある者を優遇することはしなかった。

上記の差違の出現は全くの例外というべき程度であったけれども、第一次審査に対して異論を述べたことは確かに失礼であった。ここでお詫びを申し上げる。

## (3) 賞金か補助金か — この賞の性格

本基金に対する一つの疑問点は、これが齋藤六三郎賞という賞であるのか、あるいは助成基金としての助成であるのかということ、気付いたときに運営会議等で早急に解決しておくべきことであった。応募者や受賞者から、この疑問を投げ掛けられたことはなかったけれども、ノーベル賞と同種な賞であるなら、その使徒は自由で受賞者に任せられる。然し、助成金であるのであれば科学研究費補助金の場合と同様に、研究・実践の資金としての支出予定とその結果報告がなされる必要がある。少なくとも、支出予定を提示して金額を査定しなければならないだろう。仮にその額が一定額を超過して打ち切りになるとしてもである。賞であるならば既に行われた実践研究の成果に対して与えられるのに対し、助成ならばその助成を受ける実践研究が受賞以後に行われる実践・研究の資金として与えられることになる。

本基金が、もともと支出予定書の提出を求めず、個人研究に長期にわたり一律に20万円(その後30万円)を与えたことから考えると、賞としての性格が強く、資金としての性格は弱い。また、受賞者の選考は、主として実践研究の成果に関する良否の判断であったから、賞の性格を保持しており、応募者や受賞者も賞として理解していたものと考えられる。次項に記す基金受託先の銀行からの予算書添付の要望や、これも後記する助成金額の20万円から30万円への増額に対する議論もこの問題と関わりがある。

## (4) 応募書類への予算書の添付

基金の終了数年前に、信託銀行から応募の際には支出予定表の提出をお願いしたいとの話が出たのは上記の一方の立場に立つと当然のことである。ただし、信託銀行は書類を手元に置きたいとの理由であったので、上記した助成金か賞金か否かの問題には触れずに、事務的処理として認めることにした。ただし、選考に際しては支出予定表を判定資料にしないことを認めてもらい、第一次審査でもそのように行われたと思う。実際、第一

次審査において支出予定表の記載内容に関する審査者の記述はなく、私も全く判定資料にしておらず、選考結果には影響を及ぼさなかった。信託銀行が未提出者に催促するといったことは書類整理のためにあったかも知れないが、特別に問題となったことはなかった。

#### (5) 運営委員退任希望と杜威教授の参加

平成 21 (2019) 年 10 月 2 日に開催の秋田県算数・数学教育研究全県(大館・北秋)大会において、この研究会の会長を辞任して後任を秋田大学教育文化学部の杜威教授に引き継ぐことにし、それに伴って本基金の運営委員を辞任したいとの意向を齋藤創氏に申し出た。この辞任の意志は、現場に関わりのある者が運営委員であるべきである、特に私のように選考に責任をもつ者の場合に殊更にそうすべきであるとの考えに従った結論であった。勿論、秋田大学の退職と同時に研究会の会長を辞任し、それに伴い運営委員も辞職するべきであったかも知れないけれども、それは本基金に関する問題である以前に秋田県算数・数学教育研究会に関わることであり、ここでは問題としない。

ともかく、本基金に関わる私のこの意志表明に対して齋藤創から、それは不適切との平成 21 年 8 月 4 日付けの書簡を戴いた。関係する前半部分を下記に記す。

拝復

盛夏の候 益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

7 月 28 日「齋藤六三郎賞」受賞式に際して 本年ご指導ご支援を賜り、有り難うございました。

この度 ご丁寧なお手紙を頂戴し、厚くお礼申し上げます。

杜威先生のご経歴書も拝受致しました。

湊先生が長年おつとめになった秋田県算数・数学教育研究会会長を今年度でお辞目になる予定についてお知らせいただきました。それにともなって当公益信託の運営委員をご辞退なさりたいご意向と承りました。

ただ先生は殆ど設立当初から運営委員としてご指導戴き、いわば「顔」の役割を果たして下さっている特別な方と認識しています。

と述べられている。そして次に記す齋藤創の意志も知って、このまま最後まで運営委員を続けるべしとの覚悟を決めた。ただし、杜威教授に運営委員になって戴くことは諒承戴き、運営委員に加わるために必要な書類は私が信託銀行との中に入れて完備し、平成 21 年 9 月 28 日付けで運営委員となっていた。翌年の平成 22 年 7 月 29 日に開催の平成 22 年度運営会議の際に運営委員就任に際する挨拶を述べられ、この挨拶が公益信託の精神の機微に触れたこともあり、極めて好意的に運営委員に迎えられた。これは杜威教授の人柄によるものであり、杜威教授を運営委員に推薦した私も大変うれしかった。

平成 23 年 11 月 11 日に開催した東北地区算数・数学教育研究(秋田)大会の開会式に齋藤創をご案内し、会場である御所野の秋田テルサにお出で頂き、研究会の状況を見て頂いた。平成 22 年には秋田市算数・数学教育研究会が受賞していることに対する私の配慮である。

## 5. 大団円に向けて

### (1) 研究助成の有限性

本基金による助成は、銀行に残高がある限り行うことができる性格をもつ。当初は銀行預金から生じる果実によって十分過ぎるほどにまかなわれていたけれども、その後のゼロ金利時代に突入して以降は基金が目減りしてきた。そのため途中の増資(齋藤創のご弟妹の応援もあったと推測している)によって、相当な長期間の運営が可能な状態が作られてきた。

ところが、上記の平成 21 年 8 月 4 日付けの私に対する慰留の説得の書簡の後段において、

公益信託は 25 年の歴史を持つに至りましたが、最近適当な時期にピリオドを打つべきではないかと考えるに至りました。適当な時期はいつか。5

年後の30周年はどうかと思います。

その時 残余財産は県に寄贈されることになりませんが、財団と公益信託は信託法から財団の大小だけでなく存在意義が異なるように思えてきました。・・・

この書簡の趣旨は私の辞退を厳しく断じ、運営委員としての継続を求めるものであったろうが、この後段の文章は私に衝撃的であった。齋藤創が基金の有限性を、多分相当な熟考の上に認めようとされていること、時期を第30回までと具体的に考えておられること、及びその終末において生じる可能性のある残余財産の処分に関する悩みを近くにおりながらこれまで気付かず初めて知ったのである。第30回の年度は、齋藤創にとっても、私にとっても80歳である。

その後、齋藤創氏からは第30回とか80歳とかという数字に意味を与えているのではなく、その辺りでという意味だとの示唆も戴いた。

関わるとしても年齢的には最大限で80歳頃までであると私も考えていたから、齋藤創の意志がこのようなものであるなら、第30回、我々の年齢にして80歳で—それは齋藤創氏にとっても、私にとって平成26年度中に達する年齢である—終了させること、及び残余財産をほぼ零として本基金を終了させるべく動くことを決断し、齋藤創にそのように伝えた。

当時の齋藤創は、本基金が有終の美を飾るためにどうしたらよいかに腐心されておられた。個人賞の20万円を増額して50万円にしたらどうか、応募者を募って審査する手続きを簡略化して、現場の実践・研究で活躍している方々に直接研究助成をしたらどうかなど、ふり返って考えると焦燥気味とも受けとれる書簡(平成22年5月21日付け)を戴いていた。

前記の直接助成、特に個人に対する直接助成は、私には困難である。助成基金の消化を考えるなら、一つは大口の、例えば団体への支援が考えられる。もう一つは齋藤創氏が考えられた個人賞の増額である。個人賞の増額については、銀行側は20

万円を30万円に増額する程度は問題ないとの見解であった。もう一方の団体賞については、少々記しておくべきことがある。

齋藤創の上記のお考えが発露される以前に、それまで団体賞の事例がなかったことも考慮して、私は二度ほど次のことを銀行側に問い合わせたことがあった。それは、あきた算数・数学フェスティバルのような教師の活動、あるいは高等学校教育研究会数学部会で行っていた数学問題づくりの研修会といった教師の活動に対する助成金の交付は可能かという問い合わせである。これに対して、ニュアンスはその都度若干の差違はあったが、基金の性格からして不可能との回答を得ていた。要するに、算数・数学の授業の実践者を助成対象とするのが本基金の趣旨だとする見解である。

然し、この考えを忠実に守り、かつ基金の残金を零にして数年後に解散することははなはだ困難に思えた。齋藤創の書簡で残余財産が許認可官庁に所属するとした記述は本基金の終末に生じかねない状況をおもなばかって苦慮され、問い合わせや調べをなさっていたことを物語る。

## (2) 募集要項の再検討と改訂

齋藤創氏のお考えに基づき個人の賞金額を50万円とするなら、従来の20万円と比較して倍増を超え、金額的にも多いため30万円に増額し、一方で、総合教育センターでの発表は勿論のこと、会員なら希望者は全員口頭発表ができる(要するに事前審査による制限がない)日本数学教育学会全国大会(通常夏期休暇中)、あるいは地域的学会での発表を可能な限り行うことを要請し、その際、齋藤六三郎賞の助成を頂いたことを論文・発表要項に記すことを求めた案を平成22年度の運営会議にかけるべく、事前に事務局を通して運営委員全員に配布して戴き、齋藤創氏からも7月17日付けの書簡において賛意を得ておいた。

事前に何の反応もなく賛意を得られると思いながら7月29日の運営会議に提示したところ、30万円は高すぎることに、また増額するなら審査方式もそれ相応に高度なものに改訂すべしとの意見等

が出され、結局原案は否決された。

この運営会議では平成 19 年度に始まった全国学力・学習状況調査において高成績を収めた本県ではあるが弱い所もあり、そこを本基金を使って改善したいとの希望や、一方で高成績を収めた学校を称揚する賞(学力調査をコンクールとみなして)として本基金を賞金として使ったらどうかなど、本基金の意図・性格を無視し、それに抵触する意見も出され、齋藤創氏も困惑したと思う。

実際、運営会議終了後に齋藤創氏からの 8 月 6 日付けのお手紙で「残念なことでした」とのお言葉と共に、金額の増額に対する、当日出された審査方式を高度にするための複雑化に対し「査定方式などで複雑化させることは決してよい事ではありません」(同上)のお手紙を戴いた。そこで、この件に関する私の考えを詳細に記した書簡をお送りした。

募集要項の改訂が必至であることは明らかで、運営会議において改訂案の作成を秋田県総合教育センター所長福田世喜に委ねることに決定し、各自の意見を同氏まで提出することにした。

その結果は、個人賞を 30 万円までとし、査定方法は従来どおりとする案が提示された。平成 22 年 10 月 8 日付けの受託者(三菱 UFJ 信託銀行)から文書において、この件については運営委員長はじめ全員から同意が得られたことが記され、特に「なお、福田運営委員からご指摘を頂き、募集要項記載の個人賞の金額 20 万円を募集・選考方法(に)係わる内規文書に規定の 30 万円に修正させていただきましたので、合わせてご報告申し上げます」とあり、続いて、「なお、運営委員長に修正後の募集要項をご確認頂いております」の文面が記され、次年度の平成 23(2011)年度の募集要項の改訂も実現した。団体賞の金額は 80 万円に変更はない。なお、福田世喜の改訂において下記のように応募手続きの明確化がなされた。

- ① 所属する学校長(あるいは機関の長)の推薦を得る(所定の個人賞応募用紙による)。
- ② 所属する組織の長等の推薦を得る(所定の団体賞応募用紙による)。

所属する組織の長等の推薦とは、例えば、秋田県算数・数学教育研究会の場合には、会長の推薦を得る。

(他の具体例)

- ・学校内のグループの場合～校長
- ・市町村内の複数の学校の教員による場合～市町村教育長
- ・上記以外の場合～総合教育センター所長

(以上)

運営会議において提出された審査に関わることはあるが、提出先の具体化に止まり、実質的な審査の高度化はない。結局のところ提案した金額増は平成 23 年度に実現し、前記の基金助成者一覧中の大友正純、柴田道子がこの改訂の受益を受けた最初の方々である。然し、賞金額の増加に対して私が意図した研究の広い公表、及びそれに伴う本基金の存在の全国的な周知への期待は宙に浮いてしまった。その結果、賞の授与式に参加された受賞者に口頭で要請することになった。この要請によったと思われることとして、日本数学教育学会主催の発表会での口頭発表資料に本基金の助成を受けたと記載していただいた者二名を知っている。

なお、前記の全国大会にはほぼ毎年参加してきたけれども、本基金と同類の地域的な私的団体から助成を受けていることを記載した研究物を見た記憶はない。

### (3) 団体賞としての助成

上記の状況のもとで私にできることは、ともかく団体賞の助成を増やすことにある。平成 23 年度には、中仙中学校の田仲誠祐校長に趣旨を理解して戴き、中仙町教育研究会学力向上部会に団体賞を受賞していただいた(その年度の個人賞は前記の 2 件)。

翌年の平成 24 年からは、従来の方針とは差違があるが、秋田県算数・数学教育研究会が設けている、高等学校を含む支部を団体賞の主たる対象とすることにし、平成 24 年 7 月 31 日の運営会議において団体賞として秋田県高等学校研究会数学

部会(伊藤成年部会長)と秋田市算数・数学教育研究会(小野恵吾会長)に団体賞を授与した(他に個人賞2件)。

この団体賞は、例えば、前記の中仙町教育研究会学力向上部会の団体賞とは趣において差違があり、趣旨の理解が求められると考え、上記二つの団体に対して、大館鳳鳴高等学校の伊藤成年校長には前年(平成23年)の11月28日(月)に、秋田市立河辺中学校三浦雄一校長(秋田市算数・数学教育研究会)には前年の11月22日(火)に学校を訪問して説明に当たった。本来的には運営委員会において議論し、その適否の判断に従うのが筋であるが単独で決定し実行した。齋藤創氏に話さなかったのは旅費等で悩ませることになるし、会議の議題にしなかつたのは、不要と判断されることを恐れたための結果である。前者は「大館鶏飯旅行」、後者は「河辺へのタクシー・ハイク」という私的行動のついでに学校に立ち寄ったわけである。

翌年度の平成25年度は湯沢雄勝算数・数学教育研究会が同様な趣旨で受賞した。

#### (4) 改訂募集要項の確定

この公益信託が後記のように大団円を迎えることができたのは、最終的には、運営委員長の米田進秋田県教育長、三菱UFJ銀行の本基金担当者伊藤幸雄、以後の運営委員の各位、及び残金の行き先を自ら探して決意をされた齋藤創ご本人に決定的に依存している。

米田進氏は平成23年4月に秋田県教育長に赴任され、運営委員長とられた。なお、この年、平成23年度の運営会議(7月29日開催)の議事録によれば、運営委員は米田進(委員長)、湊三郎・畑澤潤一・伊藤幸紀・杜威・風登森一(運営委員6名、出席者6名)(議事録記載順)、信託管理人は狩野豊太郎、オブザーバーは鷲谷真一であった。

伊藤幸雄には、上記の募集要項改訂にかかわって受託者としての法的立場から整理をされ、平成26(2014)年における基金の解散に向けて募集要項の改訂案を運営委員に配布し、齋藤創、及び湊の

意見を入れた再訂案を持ち回り会議の形式で決定していただいた。この25年の改訂は、先に(1)の最終段落で述べたような硬直したものでなく、最終回での軟着陸を可能とするためのものである。実際、募集要項に記された応募資格(平成25年度に適用したものは)下記の様であった。

① 秋田県内の小学校・中学校・高等学校及び関係機関の教職員(個人賞)

② 秋田県算数・数学教育研究会及びその支部等(団体賞)

※ ②の「等」の中に他の任意団体も含まれると解釈し、変更不要と考えるとの注記があり、更に、賞の項に ① 個人賞の上限は各30万円と賞状、② 団体賞の上限は各80万円と賞状、を授与することを追加し、ただし、秋田県全体の算数・数学教育に関わる活動を行う団体には助成金(上限1団体200万円)と賞状を授与するとの改訂版を持ち回り会議の案として作成された。持ち回り会議の際に、上記②の「等」には、「NPO法人あきた・まなVIVA創造塾」を含めるとするとの約束を、そこに明記はしないが、容認することとした。

齋藤創は、最終的に残金がないように、かつ単なる寄付とならないように自ら探し、数学オリンピックの選手を養成する目的で設立された「NPO法人あきた・まなVIVA創造塾」に将来の夢を託されることにされた。そこで、上記案のうち、※の部分より明確にして「等」の中にこのNPO法人を含むことを諒承しておくこと、追加の部分の金額200万円を300万円に増額することの再訂案を作成して戴き、再度の持ち回り会議で諒承して戴いた。

なお、これは次年度当初になるが、齋藤創氏に対して米田教育長から運営会議の席で感謝状を送呈して戴きたいと、義務教育課の担当にお願いした。例のない措置だったためか、義務教育課ではなかなか決定に至らなかったようであるが、教育長に話したところ直ちに賛意を表されたという。この準備は三菱UFJ信託の担当者である伊藤幸雄があたり、私との間で文面等のやりとりが行わ

れた。なお、伊藤幸雄から選外となった者にその通知と共に努力賞を差し上げたらの意向が示され、齋藤創への感謝状の贈呈と共に、努力賞についても全員一致の賛成を得た場合に送呈することにした(結果は全員賛成であった)。先に記した平成 26 年度の最終回だけに特別に設定されたこの努力賞は、三菱 UFJ 信託銀行における本基金を平成 24 年度から担当された伊藤幸雄の発案になるもので、この年、及び次の 25 年度において受賞の非該当者に対する連絡という経験を踏まえての暖かい措置であり、受賞者、非受賞者に対して実践研究の指導をお願いしたいと私に要請したのも伊藤幸雄であった。

### (5) 最終の運営会議

平成 26 年 7 月 25 日(金)、秋田市内のホテル・パールシティ秋田川反、2 階芙蓉の間で午前 11 時から最終の運営会議が開催された。基金助成者一覧に既に示したように、従来になく多数の受賞団体の代表、受賞者の出席のもとに会食が行われ、滞りなく終了した。齋藤創のご列席がなかったのは寂しいことであったが、齋藤六三郎記念数学教育助成基金の大団円というに相応しかった。

実は、先に表記した第一回の受賞者の中で連絡が取り得る齋藤松子に最終運営会議で齋藤創に花束の贈呈をしていただけないかと考えて、お手紙を差し上げた。ご返事をお待ちしていたところ、ご本人から、体調不良のため秋田市内の病院に入院中であるのでご希望に添いかねるとのお電話をいただき、実現しなかった。そこで、別件にかまけて秋田県教育長に事情をお話し、秋田県総合教育センター指導主事椎名美穂子(平成 25 年度受賞者)にこの件をお願いしたのである。この花束は信託銀行の担当者である伊藤幸雄に会場において一旦受け取って戴き、病院において伊藤幸雄から齋藤創に手渡された。

上記感謝状(実物は横長縦書き)の文面

齋藤 創様

あなたは公益信託齋藤六三郎記念数学教育助成基金を通じ三十年の長きに亘り小中高等学校教職

員の数学教育研究に多大な助成をされ本県算数・数学教育の振興に大きく寄与されました。ここにその功績をたたえ深く感謝の意を表します。

平成二十六年七月二十五日

秋田県教育長 米田 進

秋田県算数・数学教育研究会の杜威(運営委員でもある)から、多数の所属員が助成を受けたことに対する感謝状の贈呈を考えられておられたこと等を記した書簡を運営会議の翌々日の 7 月 27 日に齋藤創に送付した。

齋藤 創様

前略で失礼します。入院でご不自由なこととお察し致します。去る 7 月 25 日には、貴殿のお隣りに座し得なかったのが極めて残念ながら、議事関係は順調に進行し、予定通り 6 団体と 3 個人が表彰され、助成金を交付されました。

(団体)

NPO 法人 あきた・まな VIVA 創造塾	300 円
本荘由利教育研究会算数数学部会	80
鹿角算数・数学教育研究会	60
能代市山本郡算数・数学教育研究会	80
大曲仙北算数・数学教育研究会	80
秋田県算数・数学教育研究会	50+ $\alpha$

(個人)

伊藤 弘幸(中通小)	30 円
上松 起利子(男鹿東中・センター研生)	30
中山憲太郎(中仙中)	30

(注 上記 50+ $\alpha$  は残金の最終決算時に  $\alpha$  ( $\alpha > 0$ ) を想定)の額が決定する。秋田県算数・数学教育研究会に対する交付は他の団体・個人よりも遅れて行われる)

残る五名、泉 一也(下北手中)、淡路亜津子(湯沢翔北高)、倉田一広(稲川中)、高橋裕樹(鷹巣南中)、長沢留美子(東成瀬中)に努力賞の賞状と 1 万円の図書カードを送りました。秋田魁新報(26 日)に記事が出ておりましたが、その中に 27 団体、27 個人に助成となっていました。私の数えるところ総体で 72 団体・個人です(何かの取り違えも

あるかと思ひ、今後詰めてみたいと考えます)。

なお、基金の解散に関する事務手続きを今後順次執り行うことが報告諒承されましたが、あきた・まな VIVA はもちろん、助成を受けた団体や個人は今後の活動を通して、助成金を有効に活用することを誓っておりましたので、今後具体的成果が生まれるものと大いに期待しているところです。

貴殿の崇高な志、父君のお名前を冠する助成金の創設というご構想、さらには無から有を生む実行力に日頃から敬服して参りました。改めてお礼申し上げます。私は、私情を入れない公平性をもってしたつもりですが、身近な者には冷たく感じられていたかも知れません。今回受賞できなかった個人にも、よく知遇する者が三名ほどおりました。ただ、今回の団体賞を受賞された団体の代表として出席された方には私の直接の弟子(湊ゼミ出身者)が三名もおおり、うれしく懐かしい思いをさせていただきました。

秋田県算数・数学教育研究会では所属の多数の教師が表彰・助成を受け、現場の活性化に果たした基金に深く感謝しており、今回の運営会議に際して感謝状を差し上げたいと杜威会長から相談がありました。県からの感謝状との競合を避けて、来年度の全県大会の席でお渡しすることにした次第です。どうか、ご静養の上、健康を快復されて、その席に参上下さいますようお願い申し上げます。

銀行の伊藤さんには、今回の席上でお礼申し上げる機会を捉えることができず、帰り際にお礼申し上げるだけとなりましたが、しばらくの間は残務に関して連絡もあることと存じます。伊藤さんは教育学部の卒業生と聞いておりますので、当方の邦訳書等をお送りするなどして感謝の意を表するつもりです。

既に伊藤さんが会議資料を持参されたと思っておりますが、運営会議の無事終了について私なりの報告をさせていただきました。

早いご快復をお祈りしております。今後も機会

を見つけてお会いしたいと存じておりますので、なにとぞお見捨てくださいませぬようお願い申し上げます。

湊 三郎

追伸 いつも自筆のお手紙を頂いており、今回は手書きにしたいと思いましたが、極めて困難で、ワードプロセッサにさせていただきました。

最終の運営委員会に関する上記の私的報告に対して、病院で執筆された齋藤創から私宛の書簡を字句をそのままに下記する。これが齋藤創氏と私との最後の通信・交流となった。その文中の三菱 UFJ 信託銀行の伊藤さんは伊藤幸雄、その他 1 名は、宮下雅裕である。また、鬼籍に入られた方々としては齋藤、橋本の両教育長、宮田正彦、菊池俊一、椎名光雄、池田好通、狩野豊太郎等を指すものと察する。

平成 26 年 8 月 2 日

湊 三郎 先生

公益信託齋藤六三郎記念数学教育助成基金

齋 藤 創

拝啓

この度の当公益信託最終の記念すべき委員会と表彰式に病気のためとはいえ、出席できず、皆様にご迷惑をおかけしてしまい、申し訳なく思っております。

しかし、30 回目の表彰は先生と私が意図した内容が実現したものと満足致しております。

まさに有終の美を飾ったのではないのでしょうか。大団円でした。

湊先生、丁重なお手紙を戴き、有り難うございました。30 年のうち 20 年以上に亘って運営面、特に審査の実務でご支援を賜ったことはその実績は大きく、公益信託にとって最大の幸せだったと感謝と敬意を申し上げます。

先生のご人格、能力に親しく触れさせていただき、今後も気安くお付き合いさせていただける親近感を抱いております。

25 日の表彰式終了後、三菱 UFJ 信託の伊藤さん

と他1名の方が病室に見え、当日の模様をお話してくれました。

米田教育長からの立派な感謝状をいただいたことも感激致しました。

私の少年みたいな夢である国際数学オリンピック選手養成の事業を「まな VIVA 創造塾」が取り組んでくれることにもなり、有り難いことと思っています。

この30年間を回顧し、既に鬼籍に入った方々を含めて実に多くの方々のご協力、ご支援をいただいたことに思いが至り、感無量でございます。

これからは当県の教育、特に数学の向上、発展を祈りつつ静かにみまもっていきたくと思っています。

湊先生の益々のご健勝をお祈り致します。

敬具

## (6) 本基金の消滅

平成26年10月20日付けで、公益信託 齋藤六三郎記念数学教育助成基金 受託者三菱 UFJ 信託銀行株式会社から、昭和59年7月の設立以来、秋田県内の小学校、中学校及び高等学校において数学教育に携わる者または団体に対し、研究助成金の給付事業を行って参りましたが、本年度「秋田県算数・数学教育研究会」への助成をもって、信託財産が消滅したことにより平成26年9月30日基金は終了致しましたので、ご報告申し上げます、との内容もち、同基金の終了についての表題をもつ文書が下記資料と同封されて送付された。

1. 事業概要報告
2. 処務の概要
3. 信託事務の最終計算書
4. 信託管理人の信託終了同意書(写)
5. 信託管理人の最終計算書承認書(写)

以上の資料のうち、4は本信託が平成26年9月30日をもって信託終了となることに同意することの9月8日付け信託管理人片倉幹男の同意書であり、5は今般提出のあった別紙公益信託 齋藤六三

郎記念数学教育助成基金最終計算書を承認したとする同じく信託管理人片倉幹男の承認書(何れも写)である。

## 6. 齋藤創氏の人物像の一端

本稿2において齋藤創氏の略歴を述べたことと以下の記述には多少重複するところもある。齋藤創氏は秋田市に居住されてから、町内会長(約270戸)を二年間務められたことがあり、ある冬の夜に多量の降雪があり、奥まった家から車が出せないから町内会長は何とかせよと真夜中に言われ、除雪をしたとのお話を伺った。憤慨したご様子でこのことを話されていた。

また齋藤創氏は昭和61年3月に直腸癌の治療により人口肛門(ストーマ)を造設したために様々な経験をおもちである。ある会社を訪問し専務と話しをしていたところ急に体調が悪くなり粗相をしてしまった時、その専務が極めて冷静にでききと処理されたこと、その夜にその専務が清酒一本を下げて齋藤氏宅を訪ねてきて「齋藤さんが落ち込んでいるのではないかと思ってきました。元気を出して下さい。こんなことで私と齋藤さんの友情を終わりにしたくないのですよ」と言われ感激で胸が一杯になり、言葉になりませんでした(身障だより、平成22, 12, 1. 秋田市身体障害者協会, p.3)という。この専務の行動とともに、齋藤創氏の人柄をしのばせる話として深い感銘を受けた。

齋藤創氏から本基金設定の動機を伺うと、御父上のことの他に何度も病気を患いながら命を助けられたという思いをよく話されていたけれども、それは後付けの感謝の心であって、御父上のご逝去の後に素早く基金の設立をされたことから、基金設定の決定的な理由は、金融業界の知識が豊富であったことがそれを可能としたとしても、御父上に対する深い思いであったことは明らかである。

齋藤六三郎先生のご退職は先に述べた理由によるが、それは齋藤創氏の(新制)本荘高校併設中学校\*三年修了時点での出来事であった。当時は併



設中学校と高等学校とは一体化していたはずだから、御父上の離任式が眼前で行われたに違はなく、大きな驚きと苦悩とを伴ったものと想像される。事前にご両親から話されていたものか、事態を受け入れることができるまでどれほどの時間を要したか察するにあまりあるが、こういう経験を糧として人格を磨いてこられたのであろう。本基金の初期の運営委員をなされたある方が亡くなられた後も、その方のお子様を含むご家族との縁を切らずにお世話をされていると聞いていた。

注記\* 学制改革が昭和 22 年 4 月から施行され、旧制中学は新制の高等学校になった。昭和 21 年 4 月に旧制中学校に入学した者は新制高校の併設中学校 2 年生となり、昭和 24 年 4 月に新制の高校 1 年生となった。併設中学校は高等学校と一体化して運営され、本荘高校においても始業式、終業式、新任式、離任式等は全て中・高で一緒に行われていたはずである。

齋藤創氏と私との関係は、当初個人的なものは特になく、運営委員として与えられた審査、受賞者判定、運営会議での報告といった仕事を通じただけの一種事務的な間柄であった。交友関係の広い方であったけれども、齋藤創氏から受賞者の推薦や判定結果に対する異論、あるいは誰を受賞者にして欲しいといった個人的な要望は後にも先にも一切なかった。当然とはいえ、なかなか難しいことではないかと思う。

根岸均氏が秋田県教育長に就任され運営委員長となられて以降、毎年一回、通常は年度の運営会議の修了後に齋藤創氏は教育長と私との三者、時に他の関係者を一名ほどを加えた懇談会を開催された。これは、米田教育長になってからも行われた。社会福祉関係で知り合いの方がおられる所を主に会場にして、時に手土産まで準備されたこともある。

平成 26 年の最終の運営会議以後は仕事を全く離れてもお付き合いを継続したいとの齋藤創氏のご発想のもとで、毎月一回の会合をもつこととして、その導入段階とも言える会合を平成 26 年の春から三回ほど開いたけれども、齋藤創氏の体調

の悪化から入院されると開催は不可能となり、特に最終運営会議の後には実現できなかった。

最終の運営会議の極く近くには体調も良好で、入院中の病院を抜け出して社会福祉関係の会議に出席し、会食にも参加され食も進んだとのことであったが(これは最終の運営会議の前々日あたりと思う)、これが負担となったのか本基金の最終の運営会議への出席は医師が許さなかった。

当日の運営会議の終了後に齋藤創氏の病室に伊藤幸雄と同道された宮下雅裕氏は、「運営委員会後にお見舞いに伺った時、齋藤様が大変感謝され、笑顔にされていたことを思い出し、懐かしい想いでおります」(令和元年 7 月 4 日付けの書簡による)と記されていた。本論考の改訂のためにこの文面を改めて読んでほっとした次第である。

## 7. 後書き

本基金が設定されたのは昭和 59 年で、助成が実際に始まったのは翌年の昭和 60 年からであり、本県小中学校の算数・数学の高い学力が全国学力・学習状況調査で明らかになるのは平成 19 年にたってからでした。秋田は文系にはかなりの自負心を持ってきたのに対し、算数・数学の学力は高くない、正直に言えば低いとさげすまされてきたのが実情ではなかったか。そのような中で、算数・数学に対する助成、しかも通常なら児童生徒に対する助成が容易に思いつくのに対し、現場教師の実践研究を称揚し、助成するというむしろ異例なことを成し遂げてきたのが本基金でした。これは、齋藤六三郎先生、及びご子息の齋藤創氏との関係からみれば自然なことであるようにも思われますが、それにしても齋藤創氏の私財を投じるという意志と実行力が結実したのが本基金であったに違いありません。

齋藤六三郎記念数学教育助成基金に関し、その概要、及びこの事業を発案され、遂行された齋藤創氏に関する記録を記すことの光栄に恵まれたのは、うれしいことであり、過ぎし日の思い出をたぐることができたのは幸せなことです。秋田にこのような社会的視座をもち、かつその視座に個人

の資産をつぎ込むという偉大な方がおいでになった、しかも身近な所においでになったことに心が引かれます。

秋田県総合教育センターに勤務時の土倉新也、田仲誠祐、鷺谷真一、稲川一男、小松田哲也の諸氏は私の知る範囲の方々ですが、私が運営委員になる以前の、受賞者の第一次選考に関わられた方々をも含めてお礼を申し上げます。信託管理人を永らく勤められたのは狩野豊太郎氏で、本基金の最終段階に立ち会われ、結びを付けて戴いたのは片倉幹男氏です。

三菱 UFJ 信託銀行の担当者として接して戴いた中之庄谷太一、檜崎則久、佐藤和彦、雨宮史朗、木村勉、伊藤幸雄、及び宮下雅裕の各氏、また代理店の北都銀行の大庭雅樹、鈴木一也氏等の担当者の方々にも感謝致します。特に最終段階において、柔軟かつ積極的にことに対応して戴き、有終の美を飾ることができました。

齋藤創氏への例外的と思える表彰状発行の願いをお許しの上、本基金の運営委員長であるご自身の御氏名をそこに記して戴いた米田進秋田県教育長に感謝致します。個人情報にも関わることになる本記録の作成をお認めの上、基本的資料をお送り頂いたご子息の齋藤荘氏に感謝致します。齋藤創氏から戴いた多数の書簡、齋藤創氏との懇談の座でのお話、運営会議資料、齋藤創氏の厚生労働大臣表彰祝賀会時の資料等を用いました。

三菱 UFJ 信託銀行の業務担当者であった各氏、また、光禅寺住職の伊東義寛氏、墓所にご案内頂いた渡辺様、県立本荘高校長榎尾尚樹氏、その他、過去の授賞者や本間光幸、佐藤敬顕、田村良則、高橋悦美の各氏、また宮川武史君にお礼を申し上げます。

光禅寺においては、齋藤六三郎先生の逝去の日を承り、また得ていた知識が総体的に整合的であることを確認できました。

ところで、前記の宮下雅裕氏は、本基金を最初に受託した時に担当部署は異なりながら日本信託銀行秋田支店(秋田駅前広小路の、当時のリボン(Ribon と書かれていた)会館の向かいにある三宅

ビルと称せられた建物の 1 階に開設)に在職されており、「秋田県で第 1 号となる公益信託」の受託として齋藤六三郎基金が銀行内で話題となったことを記憶されておられます。その後社内で信託業務担当に回り、本基金の最終の運営委員会への出席と、終了後のお見舞いに伊藤幸雄氏に同行されて病院に伺ったことに「不思議なご縁を感じて」おられます。

問い合わせ等が多数の方々から好意的に捉えて戴けたことは齋藤創氏の徳であることを知りつつも、皆様のご好意にお礼申しあげる次第です。

秋田さきがけは本基金に関し何度かとり上げて戴きました。特に、平成 26(2014)年 7 月 26 日付け秋田さきがけでは、齋藤六三郎数学教育助成、6 団体 3 教諭に贈呈、「役割全う」今回で最終、の三段の見出しで最終回の受賞者・団体、及びこの基金の目的と 30 年の歴史を記事にされました。受賞者と研究課題以外は代わり映えない本基金の事業を記事にして戴いたことに感謝します。

運営委員に任ぜられて以降、齋藤六三郎先生のお墓参りをしたいと思っておりながら、そのうちにと過ぎて参りました。最終運営会議から 5 年後の令和元年 8 月 3 日に帰省中の孫の車で菩提寺の光禅寺に参上し、伊東義寛住職にお会いしました。お話では本基金の増資の際に協力されたご弟妹の方々が齋藤創氏のご逝去後次々に亡くなられたとお話を伺いました。そういったお話を伺ってから、ご親戚の渡辺様のご案内を戴いてお寺からやや離れた所に位置し、その日は快晴で強烈な日光のもと、真っ青な日本海を見渡す小高い丘にある齋藤家のお墓(後頁写真)にお花を手向けました。ようやく齋藤六三郎先生(戒名、教覚院英山道秀居士)への思いを果たし、齋藤創氏(戒名、本覚院創貢勤良居士)をも拝むことになりました。

あまり遅くならぬうちに記録を作成しなければとの思いながら、突然に仕事が入って一旦中止をし、再び取りかかり初めたところ、またもや一時中止となるなど、遅れが大幅に生じました。こういったことの故に、遅れのみでなく、間違いや不均衡もあるに違いないと覚悟しております。

本論考に受賞者からのお話を載せることも考えましたが、全体の分量等を考慮の上にとり止めにしました。最終回に近いところでは、応募者全員に私の意見・感想を送り、何人かの方から礼状を貰っていました。そうすれば、別途の面白味のあるものができたかも知れません。ともかく、本稿が私的過ぎるとのお叱りもあるでしょう。その際は何卒ご寛容にお願い申し上げます。

なお、冊子の最終頁に若干の写真を付すことができました。齋藤創氏やご長男齋藤荘氏とお孫様の写真は齋藤荘氏から提供いただきました。その他は、私が撮影したお墓の写真を除き、運営会議の当日に銀行側の事務局によって撮影されたものです。撮影者の方々にお礼申し上げます。

(菊花薫る令和元年霜月三日)

(令和二年如月二十一日改訂)

## Subsidy of SAITO Rokusaburo Award for Practical Research of Mathematics Teachers in Akita

MINATO, Saburo,  
Emeritus Professor of Akita University,  
Advisort, Society of Mathematical Education in Akita

### Summary

The purpose of the article is to discuss and record the process and ending of the Subsidy of SAITO Rokusaburo Award for teachers or teachers' associations, performing outstanding practical researches into mathematical education of Akita through 30 years from 1985 to 2014.

Using gathering data, I could record for future ages the teachers or their associations subsidized from the SAITO Rokusaburo Award, with their names, research themes, and their obtaining awards, and I could also considerably describe the process and its ending with his idea and the profile of SAITO Hazime, the founder of the Award.

**Key Words : Subsidy, Math Teacher, Practical Research, Akita**